

2014 年度 FD 研修会

1. FD 研修会

「新しい時代の教育：実践と理論をつなぎ、自ら調べ自ら考える 学生を育てる」(Teaching in a new era: Linking Practice and Theory and preparing for students self-directed learning)

講師：フレット・コルトハーヘン（ユトレヒト大学名誉教授）

司会：武田 信子（人文学部教授）

通訳：山辺 恵理子（本学非常勤講師）

招聘：坂田 哲人（本学非常勤講師、文部科学省科学研究費研究による）

日時：2014年10月30日（木）14:40～16:10

場所：武蔵大学 1203 教室

研修会の趣旨

教師教育研究の先駆者、リフレクションの研究における世界的な権威で、FD 研修の経験も豊富なユトレヒト大学フレット・コルトハーヘン名誉教授をオランダから迎え、本学の三理想を踏まえたグローバルな視点で、「自調自考」を実現する大学教育を考える。学生たちの力を引き出し、授業をより生き生きとした場にするために、先生や学生たちが何を考え、何を感じ、どうしたいと思っているのか、あらためて考える機会を持つ。

今回は全学的な取り組みとして、非常勤講師にも参加を呼び掛けた。参加者は教員 22 名、職員 3 名、外部記録者 2 名であった。



なお、FD に対するとらえ方などを事前に把握するため参加者に簡単な事前アンケートを行って準備し、終了後にも事後アンケートを行った。アンケート結果は最後に記載している。

講師略歴 Prof. FredA. J. Korthagen (<http://www.korthagen.nl>)

教師を始めとした専門職の人材育成に取り組む世界的な教育学者。数か国語に翻訳されている主著“Linking Practice and theory : The Pedagogy of Realistic Teacher Education” (2001) (『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』武田信子監訳 学文社 2010) において、教育が学習者にとってリアリスティックに提示される必要性を説き、学習を促進する教師の「省察（リフレクション）」プロセスを研究して、ALACT モデルという経験学習サイクルを提唱する。世界 19 か国で学会の招聘基調講演を含む多彩なテーマの講演・研修を行い、米国教育学会で 2 度の受賞の他、米国教師教育学会でも受賞。様々な人材育成機関のコンサルタントを兼任している。ユトレヒト大学名誉教授およびアムステルダム自由大学教授。

講演の内容

当日使用したスライドと、講演内容の要約を掲載する。(要約 武田信子)

KOR THAGEN  Universiteit Utrecht 



新しい時代の教育 実践と理論をつなぎ、 自ら調べ自ら考える学生を育てる

フレット・コルトハーヘン
オランダ・ユトレヒト大学

© Korthagen, 2014

1

本研修会のタイトルは「新しい時代の教育:実践と理論をつなぎ、自ら調べ自ら考える学生を育てる」としました。

KOR THAGEN  Universiteit Utrecht 

6部構成

1. 私たちが生きる文脈：変化し続ける世界
2. 国際的に見られる教育の根本的な変化
3. リフレクション（省察）の役割：省察とは何か？なぜ重要か？どのようにしてするのか？
4. 教え方を改善するにはどうすればよいか？
5. ディスカッション
6. 効果的な枠組み

2

本研修会は6部構成で行います。

KOR THAGEN  Universiteit Utrecht 



教師教育の例



教育的知識 教師 教室

3

これまで教育は、教師が知識を学生に伝達するものと考えられてきました。学生が理論や知識を得て、実践的に活用することが出来るようになるかどうかは、学生の能力によるとみなされてきました。

KOR THAGEN  Universiteit Utrecht 

理論から実践へのアプローチの失敗

- 移行期のショック：生き残りをかけた奮闘
- その時に行われている実践に適應して、理論を見返すことをしない
(教育に対し、限定的なインパクトしか持たない)
- 実践的な(かつ理論に基づいた)ツールを必要としている

4

しかし、現在は、様々な研究結果から、学生は教わるだけでは理論から実践に応用することが困難であると知られています。その知識や理論を活用すべき現場に行くと、そこで実践されている既存の在り方に適應してしまい、「こうすればいい」という理論に立ち返ることが出来ないのです。教育内容は、現場では限定的なインパクトしか持ちえないのです。

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

一般的にみた 教育における中心的な課題

1. 理論から実践への「**転換**」における教育の課題は大きい
2. 学術的な知識 ≠ 実践的な知識
3. 今日重要な知識も、明日にはすでに使い物にならなくなっている可能性

5

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

キャリアを通して直面する
あらゆる場面の対処法を
事前に教えることは不可能である

↓

成長し続ける力を発達させる

↓

経験から**学ぶ術**を学ばなければならない

↓

リフレクションを、他者との協同のなかで、促す

6

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

例から考える

- 例 1 : 教師
- 例 2 : セールスマン
- 例 3 : チームリーダー

7

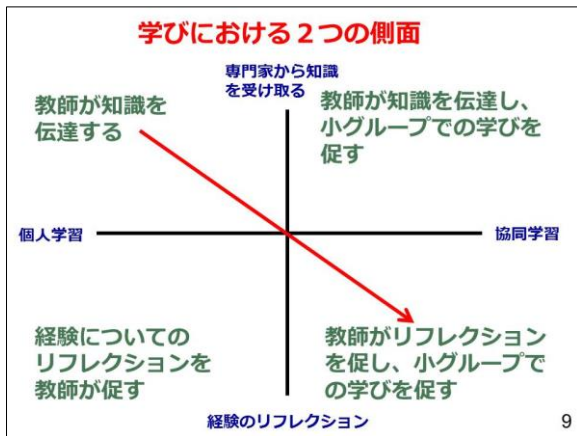
8

理論から実践に、何かを転換していく、というとき、どのような教育を持ってそれを実現していくことができるでしょうか。教育の課題は大きいといえるでしょう。学術上の知識は、実践的な知識とはイコールではないのです。しかも、大学教員が今日教える知識は、学生たちが明日用いるときには、使い物にならなくなっている可能性があります。学生たちは未来に生きるのですから、活用できる理論や知識を持つことが必要なのです。

しかし、学生の人生を見越して、あらゆることを事前に教えておくことは不可能です。むしろすべきことは、彼らが成長し続ける力を発達させることであり、また、学生たちは、経験から学ぶ術を学ぶ必要があるのです。そこで、その術として、リフレクションを、学生同士が協同する中で、促進する教育が必要なのです。

いくつかの例で考えてみましょう。

人は、頭で考えますが、その奥に、感じていることがあって、また更に奥には欲していることがあって、行動はその欲しているところから生じますから、頭で考えて行動を修正しようとしても修正できるものではないのです。



学びを2つの軸で考えてみましょう。1つの軸は、個人で学ぶか他者と協働で学ぶかです。もう1つの軸は、誰かから知識を受け取るか、自分で経験をリフレクトして学ぶかです。

隣の人と5分間のワーク

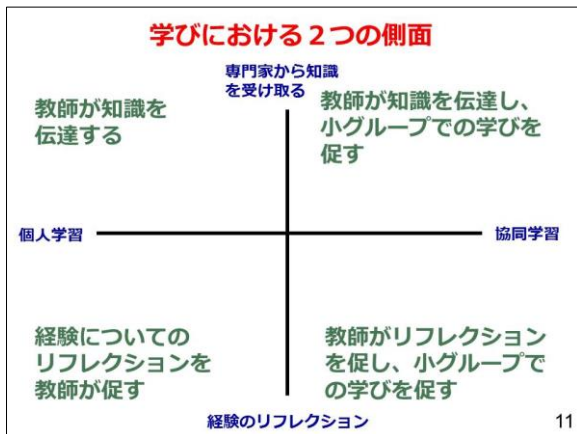
話し合うテーマ：

教師または教育担当・指導者の方：
4象限のそれぞれに、どの程度当てはまりますか？

学習者（児童・生徒・学生など）として：
どのような教育を最もよく経験しましたか？
(先生たちはどの象限に当てはまるか？)

10


それでは、隣の人と5分間のワークをしてください。あなたは、自分がどのような教育をしていますか？あるいは、自分はどのように学んできましたか？




もう一度、あなたの学びを振り返ってみましょう。どちらだったでしょうか。そしてそれはどういう結果をもたらしてきたでしょうか。



今、多くの人が、伝達型の教育や学習を経験してきたことに気がついたのではないかと思います。しかし、そうでない方法に変わりたいと思っても、人は急に行動を変えることはできません。それが普通です。ですから、今自分が「居心地がよいと感じられる領域」から急に出ようとする必要はないのです。ほんの少しだけ、自分にとって居心地がよいと感じられる領域から一歩だけ外に出られるか、安全な範囲で動けるかを考えてみましょう。求められるのは、未知の世界、不確実なものを受容しようとするちょっとした勇気です。

KOR THAGEN  **リフレクションの役割**


- 経験 >>> それから何を学べるか？
- 個人的な悩み >>> どうすれば私は改善・向上することができるか？
- 目標 >>> 達成までの計画：
 - 何を学びたいか？学ばなければならないか？
 - どうすればそれを学べるか？
 - 誰と学ぶことができるか？

現在  目標

自己主導型学習

13

リフレクションというのは、その変化を安全に起こすためのツールです。自分の意志で、自分の経験から、何とか少し改善しようと考え、具体的にどのようにすればいいか、何を学びたいか、学ばなければならないか、誰と学ぶことができるか、を考えていくのです。

KOR THAGEN  **学生をいかに養成するか？**


1. 教育する知識やスキル

しかし、どういう種類の知識なのか？

大学		適用する文脈
学術的な知識	>>>	学術的な文脈
?????	>>>	実践的な文脈

14


皆さんは教員ですから、学生を育てることを仕事としてはいはずです。皆さんが学生に教育すべき知識やスキルは、どのような種類のものでしょうか。学術的な知識をそのまま伝えればよいのでしょうか。それは学術的な文脈で使えればよいのでしょうか、実践的な文脈で使うのでしょうか。適用する文脈はどのようなものか、考えてみて下さい。

KOR THAGEN  **学生をいかに養成するか？**

1. 学術的な知識と実践的な知識の双方が必要である (Theory and theory ; 大文字の理論と、小文字の理論)
2. 理論と実践のつなぎ方を学ばなければならない
3. 経験をリフレクトし、そこから学べるようにならないといけない
4. 効果的に協働できるようにならないといけない
5. リフレクションをして、自分自身の発達を自ら方向づけなければならない (自己主導型学習)

15

実は、学生たちが必要とする知識は、学術的な知識と実践的な知識の両方なのです。彼らは理論と実践のつなぎ方そのものを知らなくてはなりません。自分が経験したことをリフレクトし、そこから学べるようにならないけません。リフレクションをして、自分自身の発達を自ら方向づけなければならないのです。これを自己主導型学習、武蔵大学で言うところの、自ら調べ自ら考える学習、ということになります。

KOR THAGEN  **コントロールの位置**

コントロール（舵取り）しているものは、内にあるのか外にあるのか

リフレクションを促すことは、内側からコントロールできるように促すこと


16

さて、その学習のコントロールは、自分のうちからできるのでしょうか、それとも外からなされるのでしょうか。リフレクションを促す、ということは、自分が自分を内側からコントロールできるようになることです。

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

効果的なリフレクションとは？ 研究により明らかになった留意点


行為志向型 と
意味志向型 のリフレクションの対峙
(Mansveld-Longayroux e.a.,
2007; Hoekstra, 2007)



17

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

省察モデル



行為の選択肢の拡大
これはどういう結果を生む
だろうか？

5 試行
1 行為

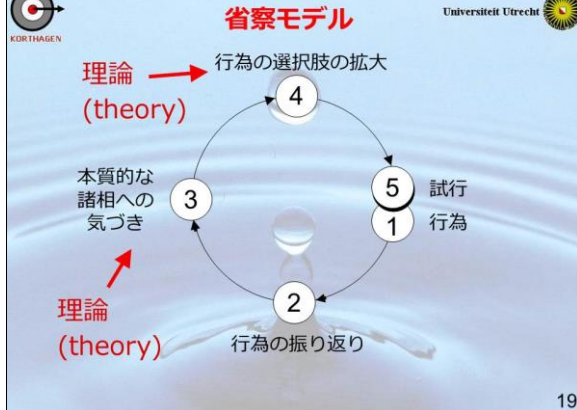
2 行為の振り返り
何が起きたのか？

3 本質的な
諸相への
気づき
重要な点はどこに
あったのか？

18

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

省察モデル



理論 (theory) → 行為の選択肢の拡大

理論 (theory) ↑ 本質的な
諸相への
気づき

5 試行
1 行為


2 行為の振り返り

19

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

第2局面で用いる省察的な問いかけ

私は何を考えていたのか？	相手は何を考えていたのか？
私はどのように感じていたのか？	相手はどのように感じていたのか？
私は何を望んでいたのか？	相手は何を望んでいたのか？
私は何をしたのか？	相手は何をしたのか？



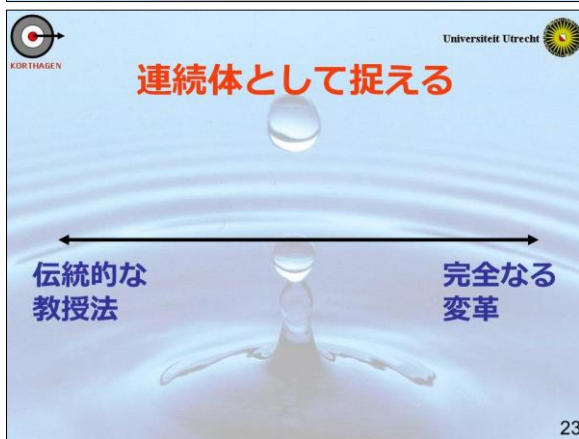
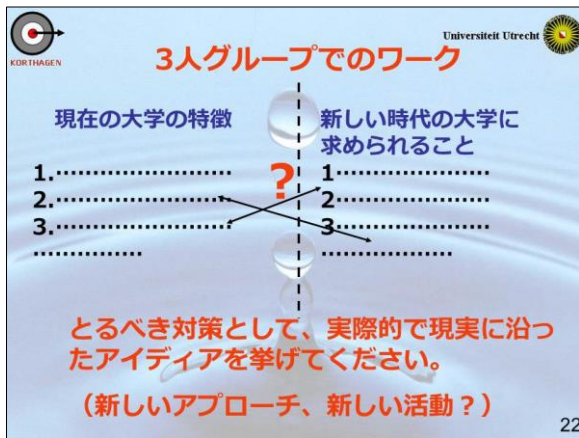
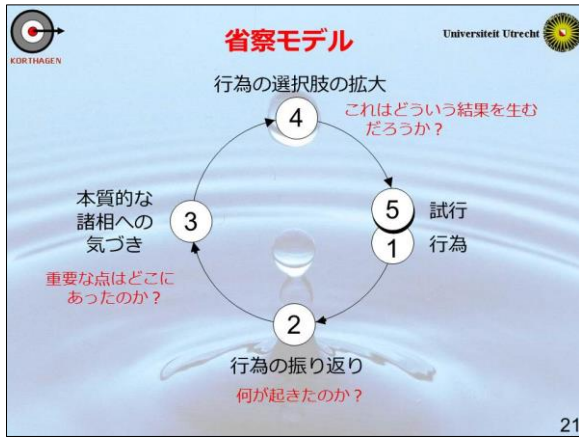
20

そのようなリフレクションを効果的にするためには、リフレクトする方向性を、行為志向型、つまり自分の行動を表面的に反省して変化させようとするリフレクションから、意味志向型、つまり、その行為がなぜ行われるのかという原因までをしっかりと見つめるリフレクションに変えていかなくてはなりません。

そこで、私は ALACT モデルという省察モデルを考えました。

省察モデルでは、①行為をしたあとで、②行為をリフレクトし、そうすることで、③そこで実際に何が起きていたのかという本質的な諸相への気づきを得ます。そうすると、その気づきからこれまでに行わなかった次の行為を新しく行うために、新しい理論や知識が必要になります。そこで、学習の必要性が、学習者に自覚されます。そして学習者は学び、④新しい選択肢を得て、⑤それを実際に使ってみようとしています。

このようなリフレクションを行うときに役に立つのが、8つの問いです。ある状況において、自分は何を考えていたのか、感じていたのか、望んでいたのか、したのか、さらに、相手は何を考えていたのか、感じていたのか、望んでいたのか、したのか、をリフレクトするのです。





- リアリスティック・アプローチに関する諸研究**
- 1. 全国的調査研究 (N = 5135)**
コトレヒト大学の卒業生のうち71% (N = 81) が、リアリスティック・アプローチに基づくプログラムを「よい」または「とてもよい」と評価。その他のプログラムは、41% ($p < 0.001$)。
 - 2. 全卒業生を対象とした調査研究**
81% の人が、同プログラムは自身の教師としての仕事にとって「的確で有意義だった」あるいは「かなりの確で有意義だった」と回答。
 - 3. 詳細調査：1つのグループに対する実験研究**
「理論と実践を継ぎ目なくつないでいる」
- 24

すると、この省察モデルがうまく動き出します。

では、3人グループになってください。現在の武蔵大学の特色はどんなふうでしょうか。そして、新しい時代の大学に求められることは何でしょうか。取るべき対策として、実際的で現実に沿ったアイデアを挙げてください。

その際、伝統的な教授法と完全なる変革の間に大きな落差がある、と考えるのではなく、それが連続的につながっているのである、と考えるのみならず、それが連続的につながっている、と考えるのみならず、居心地のいい領域から飛び出す急な変革を求めているわけではありません。連続体の動けるところまで出かけてみるのです。

このような取り組みをコトレヒト大学で実際に行ってみました。教育の理論と実践をつなぐリアリスティックなアプローチを試みてみたのです。その結果はどうだったでしょうか。コトレヒト大学の卒業生 81名を対象とした調査では、71%の学生が、リアリスティック・アプローチを用いたプログラムをよいと評価しました。全卒業生の81%が、教員としての仕事に有意義だったと回答しました。また、理論と実践を継ぎ目なくつないでいる、という研究結果も得られています。

リアリスティック・アプローチに関する諸研究

4. 縦断的研究 (教育実習生357名、大学に籍を置く教師教育者31名、指導教諭128名)
 効果は、以下の要因で発揮されることがわかった：

- 教育実習生が実習中に、理論的な要素も自身の実践にとって実用的であるとある程度理解できたかどうか
- 学校(実習校)中心の期間と大学中心の期間が交互に循環するような仕組みになっているかどうか
- 教育実習生に与えられる課題の難易度や、要求されるレベルが徐々に上がっていくようにデザインされているかどうか

5. 専門家委員会による正式な評価研究
 34の評価項目中、25において「優れている」または「大変優れている」の評価を受けている

25

縦断的研究や評価研究においても、素晴らしい結果を得ています。

American Educational Research Journal
 Spring 2005, Vol. 42, No. 1, pp. 153-224



Can Teacher Education Make a Difference?

Niels Brouwer
 Radboud University Nijmegen
 Fred Korthagen
 Utrecht University


Occupational socialization in schools is a known factor counteracting attempts at educating innovative teachers. In this study, findings are reported from a longitudinal study conducted among 357 students, 128 cooperating teachers, and 31 university supervisors from 24 graduate teacher education programs. Quantitative survey data as well as in-depth qualitative data were collected over a period of 4.5 years. Development of teaching competence was followed from candidates' enrollment until their third year as in-service teachers. Occu-

26

論文がありますので、関心のある方はどうぞお読みください。






省察モデル

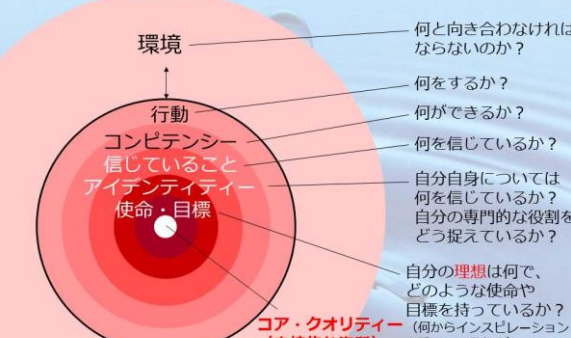


27

しかし、このモデルは、ここでは終わりません。さらに気づきを深めるために、現在私は、ALACT モデルの第三段階をより深くリフレクトする方法を開発しています。

玉ねぎモデル



28

それはコアリフレクションと言って、玉ねぎ型のモデルを使います。自分の中心となる資質を自覚し、それを用いてリフレクションをする手法です。

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

コア・クオリティーの例

クリエイティブ 繊細 信頼 勇気 好奇心豊か おおらか	柔軟性がある 愛情豊か 思いやりがある 受容的 確固たる意志がある 楽観的 心配りが細やか
--	---

29

中心となる資質には、様々なものがあります。あなたのコアクオリティはどのようなものでしょうか。その資質を大切にして、あなたがこのような教育をしたいというアイデンティティにもとづき、居心地の良い範囲からほんの少しだけ冒険をして、より良い教育を目指してみたいかがでしょうか。

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

要約： 省察を促すうえで重要なこと

1. その人自身に注意を向ける
2. 認知的／合理的な事柄だけでなく、**感じていることや望んでいること**にも目を向ける
3. 問題に焦点を当てる時間を減らし、ポテンシャルや強みに焦点を当てる時間を相対的に増やす（コア・リフレクション）
4. **メタ省察** → どう学ぶのかについての学び

30

最後に省察を促す上で重要なことをまとめてみました。

KOR THAGEN Universiteit Utrecht

学びを形づくる 5段階の手順

```

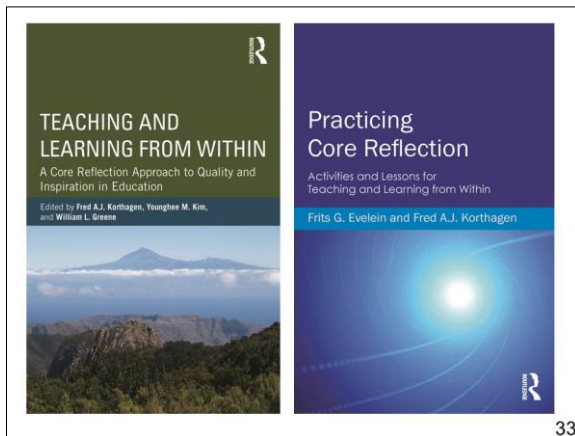
                graph TD
                A[事前構造化  
(Prestructuring)] --> B[経験  
(Using experience)]
                B --> C[構造化  
(Structuring)]
                C --> D[焦点化  
(Focusing)]
                D --> E[小文字の理論  
(theory)]
            
```

31

このような学びを進めていくには、教員が5段階の手順を踏んで、授業を進めていくことが有効であるとわかっています。しかしながら、今日はこの点については詳しく説明する時間がありません。

32

よろしければ、ここに挙げた著書をお読みください。武蔵大学人文学部教授の武田信子先生が翻訳してくださいました。武蔵大学の研究出版助成を受けていると聞いています。



33

また、まだ翻訳されていませんが、コアリフレクションについて書いた本も最近 2 冊出版していますので、お読みいただければ幸いです。



34

より詳しく学びたい方は、どうぞ、ウェブサイトをご覧になり、メールをいただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

事後アンケート結果（提出 12 人）

1. 研修会の満足度を教えてください（100%=6 人、90%=3 人、80%=2 人、70%=1 人）
2. 本日の講演から武蔵大学の教育改善に活用できると感じたものはありましたか？
はい=11 人 いいえ=0 人
3. それはなぜですか。その他、コメントをお願いいたします。
 - ・ 一人一人の行動が積み重なれば大きく変化しそうです。
 - ・ ゼミナール活動など、すぐに自分の授業で生かせる内容であり、かつ大学全体の取り組みにも活かせると強く感じた。
 - ・ 武蔵の現在の形態から将来への大きな変革を考える良い機会だった。
 - ・ 今回の研修会は一方向的な講演ではなく、聴衆参加型の講義で非常に新鮮であった。コルトハーヘン教授と通訳の先生の連携が素晴らしかった。非常に明快な英語と熱意にはとても感銘を受けた。
 - ・ 自分自身の教育活動の具体についてリフレクションすることができ、それが一定の理論的意味づけが可能であると自覚できた。
 - ・ 参加型の授業をやっているが、再度実践の整理や反省につながった。90 分が非常に有効に活用されていた。
 - ・ 専門家からの知識の伝達 VS 経験のリフレクション軸と個人学習 VS 共同学習軸を使ってのワークショップは非常に興味深かった。日頃の授業（講義）やゼミにおける学習の進め方を整理するうえで非常に参考になった。
 - ・ 学部・学科のカリキュラムの中で求められている教員としての役割を尊重すると、「知識の伝達」に力点を置きたくなってしまいが、その制約の中で学生の「リフレクション」を促すことを意識したい。担当科目の性格によってその実現の難易度が異なるし、科目を横断して学生に働きかけることができれば（つまり複数の科目を同一学生が履修して

くれれば)それは魅力的な環境だが、現実にはなかなかそうはいかない。

- ・ 生徒同士でのディスカッションに対して答えを出すタイミングなど参考になった。
- ・ 「リフレクション」という考え方について、経験的には重要だと感じていたが、具体的に分析されることで自分なりに消化して、ゼミナール形式の授業に活用していけると思う。
- ・ 学生の考え、感覚などを考えるべきこと。Theory と theory の活用方法。
- ・ 4象限の授業のスタイルは自分の授業を振り返るのに参考になるものだった。講義になるか協同学習になるのかは教室、クラス規模ではなく、学習者の(教師側も)uncertaintyの問題であるというお話が印象的でした。ファシリテーターとしての教師の役割について考えさせられました。
- ・ theory、practice に reflection というコンセプトを教えていただいた。ゼミナールで実践していることを新しい視点から見直すことができました。
- ・ 来年以降も海外から講演者を招聘して、FD 研修会を実施してほしい。

講演を終えて

FD 研修会として初めての海外研究者のセミナーを実施し、大変好評であった。コルトハーヘン氏が大学FDにおいて講演なさるのは、日本において本学が最初であり、貴重な機会を得ることができた。今後、研修会の内容について、継続的な振り返りを行い、実践への応用の機会を設けることが必要だろう。更なる解説がほしいというご意見もいただいたし、個別に口頭で引き続き学びたいという感想も複数の方からいただいた。大学の授業のあり方について、具体的な示唆が多く得られた本研修会の成果が、本学において活かされることをぜひ期待したい。

(文責：武田 信子)



研修会の様子(左)、清水実施委員長、山寄学長、コルトハーヘン教授、武田教授(右)

2. FD フォーラム

「学生と共に考える授業改善」

司会：石森 大知（社会学部准教授）

担当：杉本 伸（経済学部准教授）、漆澤 その子（人文学部教授）、奥村 信幸（社会学部教授）

日時：2015年2月26日（木）14:40～16:10

場所：武蔵大学 1203 教室

<趣旨と概要>

今年度も、学生が発信する授業改善に向けた提案について検討する FD フォーラムが開催された。フォーラム当日は冷たい雨の降るなか、学生 7 名（登壇者を含む）、教員 15 名、職員 7 名が参集し、より良い大学づくりをめざして学生と教職員とが課題を共有・対話する機会となった。なお、今年度の登壇者は以下の通りである。

萩原 悠太	（経済学部 経済学科 4 年）
鈴木 志桜里	（経済学部 経済学科 4 年）
黒川 智貴	（人文学部 英語英米文化学科 4 年）
四方田 愛理	（人文学部 日本・東アジア文化学科 3 年）
杠 駿平	（社会学部 メディア社会学科 4 年）

登壇者のうち、1 名は昨年度に引き続いての参加であり、学生の FD に対する関心の高さがうかがえる。今年度は 3 学部すべてから登壇者を募ることができ、各々 5 分ずつという非常に短い時間のなか PowerPoint を駆使しての発表であったが、学部・学科が固有に抱える問題から大学教育全体に関わる課題まで、多岐にわたる提案が発表された。

登壇者からの発表の後、1 時間ほど学生・教職員との間でディスカッションが行われた。ディスカッションは、登壇したままの学生と着席した教職員との間での対話形式で進められた。そのため、学生と教職員が対置するかたちとなり、相互の物理的な距離が場の緊張感につながった印象は否めない。とはいえ、概ね学生と教職員とが協働して課題に取り組むべく、活発な意見の交換が図れたように見受けられた。

<提案の論点>

本年度提案された内容の主な論点は、以下の 3 点に集約できる。

(1) 講義科目のあり方に関するもの

今年度は、特に講義科目に関わる提言が多かったと言える。具体的には、アウトプット型講義の提案をはじめ、共通専門科目における他学部・他学科学生への配慮、提示資料に偏向しない授業展開の要望などが挙げられる。こうした提言は、学生が積極的に講義内容を理解し、それをもとに思考・活用したいという思いのあらわれであろう。その顕著な提言としてあげられたのが、授業で使用される重要な用語を集めた学部内の授業すべてで活用できる共通用語集に対する要望である。具体例の相違こそあれ、今年度の登壇者のほとんどが講義科目の現状改善を求めていることがうかがえた。

(2) 大学図書館の運営に関するもの

本学の大学図書館は、他の同規模大学に比べて蔵書数・設備とも充実したものとなっている。それだけに、より学生が大学図書館を有効に活用できるよう、開館時間の延長ならびに休祝日の開館という具体的な要望が提言された。

(3) その他

今年度は、教務上の問題を指摘する声はあまり多くなかったが、個別具体的な提案がいくつか発表されていたので、列举しておきたい。

- ① 新年度の時間割検討の必要から、成績開示の時期を早めてほしい。
- ② 履修希望科目の重複が多いことから、1時限・5時限を積極的に活用してほしい。
- ③ 情報の更新に対して速やかに対応できるよう、3Sにメール通知機能を新設してほしい。

<FDフォーラムを終えて>

このFDフォーラムは、学生・教職員が一堂に会して授業改善に向けた検討が重ねられる貴重な機会と位置づけられる。しかしながら、例年開催が年度末の2月下旬であるためか、学生間での認知度は決して高いものではないようである。その上、教職員の参加も決して多くない。一見素朴な学生からの提案のなかに、今後の大学教育のあり方を示唆する原石の輝きが見出せるだけに、大変残念な状況にあると言わざるをえない。

今年度のディスカッションは、特にアウトプット型の講義に関する意見の交換に終始した感がある。検討対象の課題が限定されてしまった点については、ディスカッションを行う時間の長さも含め、今後検討する余地があるかと思う。しかしながら、ディスカッションにおいて主に検討されたアウトプット型の講義、言い換えるなら学生自らの積極的な思考が求められる双方向型授業の展開については、今年度のFD研修会において扱われたテーマでもあり、看過できない課題と言えるだろう。とはいえ、講義科目の現状は、登壇者のような学修に対するモチベーションの高い学生ばかりではない。こうした現状もふまえ、今後の課題としたい。

(文責：漆澤 その子)



発表した学生の皆さん（左）、登壇学生と対話を行う教職員（右）

4. 大学院 FD 懇談会

司会：清水 敦（経済学部教授）、杉本 伸（経済学部准教授）、小川 栄一（人文学部教授）

日時：2014年8月1日（金）13:00～14:30

場所：武蔵大学 88-H 教室

猛暑のさなか、本年度も大学院 FD 懇談会が行われ、大学院生 4 名（経済学研究科博士前期課程、博士後期課程、人文科学研究科博士前期課程、博士後期課程、各 1 名）、教員 9 名、職員 4 名が参加した。

本学では基本的に少人数教育の原則から大学院の各授業についても数名の履修者を対象にして密度の高い授業と研究指導を行っている。その反面、学部と同様な授業評価アンケートを行うことには困難を伴う。なぜなら、履修者が少ないために誰が書いたものか特定されやすく、その後の研究指導に支障の生ずるおそれがあるからである。そのために大学院では授業評価アンケートは行わず、その代わりに、大学院生が自由に要望を言える機会として一昨年度よりこの会を実施している。

今回は清水 FD 実施委員長、FD 実施委員杉本（経済学研究科担当）、小川（人文科学研究科担当）の司会で進行し、打ち解けた雰囲気の中で大学院生から自由に要望や意見を出してもらった。参加者がやや少なかったためか、大学院生たちも初めは緊張気味であったが、次第に活発なやりとりが行われた。

まず、大学院生室の備品についての問題が出された。プリンターの使用方法、先輩を含めて大学院生が持ち込んだ家電製品、書籍の利用・処理などである。大学院生が十分な研究ができるように大学院生室の環境を整える課題がある。

次いで、論文雑誌に関する要望があった。人文科学研究科では、大学院生・修了生の研究成果発表の場として『武蔵文化論叢』を毎年発行している。その編集作業の実務を大学院生に託しているが、大学院生から、近年入学者の減少により、実務を担当してもよいという大学院生が少なくなってしまい、将来発行が危ぶまれる状況であるという現状が指摘された。編集作業は現在博士後期課程の学生が行っているが、博士前期課程よりも博士後期課程への入学者は少ないので深刻な問題である。研究科の学生数増加については大学院生からも要望がなされたが、大学院における定員充足の問題は大学基準協会による認証評価でも指摘されている事柄であり、武蔵大学として早急な措置が必要とされている。これについて、大学院授業料の値下げ、人文科学研究科におけるコース制度変更、授業科目の充実（専攻横断科目の新設）、大学院入試の複数化等の努力によって、2015 年度人文科学研究科における入試では I 期（9 月実施）に 4 名（すべて博士前期課程）、II 期（2 月実施）に 13 名（博士前期課程 11 名、博士後期課程 2 名）の受験者があった。2014 年度が 2 名であったことと比較すると大幅な増加であり、入学者の増加が予想される。入学者がどれほどになるかは受験者の試験成績や入学手続きの結果次第であるが、大学院の教育にも良い影響のあることが期待される。

就職について、大学院生の進路状況と就職支援の充実に関する要望があった。キャリア支援センターでは、大学院生の進路相談として、学部卒の学生と同様な一般的な就職には対応できるが、修士以上の学歴に対応するような専門職への就職については十分な対応は行っていない。しかし、経済分野ではビッグデータ分析などの人材に需要があるなど、分野によっては専門職への就職の可能性も高い。大学院生としては専門職を希望したいが、どのような就職先がある

のか自体についての情報を必ずしも持っていないので、今後の大学院生向けのキャリア支援に検討の余地がある。カリキュラムとしては、経済学研究科に高度職業人コース、人文科学研究科にキャリアアップコースを設けて、専門性の高い人材の養成に力を入れている。しかし、現実の問題として専門職に就くには大学院における研究成果にかかっているため、より一層教員の指導と大学院生の努力が必要になってくる。

大学院 FD 懇談会は、大学院生と教職員とが直接懇談する機会としてきわめて有意義である。今後もこの会を継続的に実施して、教職員が大学院生の状況を把握するとともに、教職員と大学院生と互いに理解を深め、大学院教育や学習環境の改善につながれば大いなる幸いである。

(文責：小川 栄一)